Vol. VI, Pt. 2, 1955

蝶と蛾 TYÔ TO GA

(Transactions of the Lepidopterological Society of Japan)

日本産ミドリシジミ族亜種の再検討（1）

井上宗二

Revisional studies on subspecies of Tribus Theclini from Japan (1)

By SOJI INOUE

最近蝶の亜種を細分する記録が多く，特にここ数年ミドリシジミ族に就いて，殊にこの傾向が著しい．私はこの族について特に関心を持って来たので，これ等の新しい亜種について仔細に検討を加えた結果，個体変異と扱うべきものを可成り見出したので，これ等をシノニムとして以下に掲げる．尚上に述べた個体変異の範囲の中には，二つの地方に共通して分布するもので両地方の両端のものの間に若干の差異が見出せても，その変異が両者間に於て次才に移行して連続的となる場合には，当然同種間の個体変異の範囲として取扱った．

1. *Neozephyrus taxila japonicus* (MURRAY, 1875)

=*Neozephyrus taxila monticola* SHIRÔZU, 1952 **syn. nov.**

Neozephyrus taxila monticola SHIRÔZU, Sieboldia 1, no. 1, p. 22, pl.7, fig. 36, 37, 40, 41, 1952.

本亜種は杉谷岩彦氏が1925年8月中旬，長野県乗鞍岳麓白骨温泉近傍の桧峠で採集された8♂♂2♀♀をタイプとして白水隆氏により記載されたもので，分布は本州中部山岳地帯とされている．特徴として大きさは subsp. *regina* BUTLER と同様，subsp. *taxila* BREMER より僅かに小型，subsp. *japonicus* MURRAY よりずっと小型．*taxila*, *japonicus* に比し♂では外縁の黒帯巾狭く，緑色金属光沢弱し，♂♀共裏面地色は同様な色彩を持つが赤味を帯びること少し，*regina* の如き褐色でない．裏面中央部の白帯は細く，後翅肛角部の橙色紋は小さく，色は淡い．この斑紋内の黒点は小さい．亜外縁の波型白線は屈曲少し．前翅長 16〜19mm. 等の諸点を挙げていられる．これ等の特徴は，subsp. *japonicus* を数多く採集していると時折獲られる小型のもの（個体変異として）に見られる特徴に一致する．他種の場合にも屡々経験することで，小型のものを獲れば，当然体長と共に，斑紋その他の特徴は比例して小さくなり，こうした個体には地色その他の色彩の発達は，正常なものに比し弱くなる傾向を持つ．私の所有する小型のものは従って，何れも subsp. *monticola* の特徴を備えている．

私はこの亜種記載の原産地から程遠からぬ安房峠でも subsp. *japonicus* と共に採集している．又江崎悌三氏の「*Zephyrus*」綜說（6）に示されている subsp. *japonicus* MURRAY ♀-forma *pryeri* ESAKI の写真[1]は同じ桧峠で 1933年8月5日に金子石見氏が採集されたものである．原則として同一種に属する二亜種が同一個所に混棲することはないとの点からも subsp. *monticola* SHIRÔZU は subsp. *japonicus* MURRAY のシノニムである．

尚本種と直接関係はないが，北隆館発行の新昆虫臨時増刊日本の蝶特集（1951）の目録10頁に subsp. *regina* BUTLER の分布に北海道と共に本州（中部山地）とあるが信州，北関東で相当採集しているが上記の如く，すべて *japonicus* で，*regina* に該当するものは中部山地に分布しないのでないかと思う．尚私の有する青森市外で採集されたものは，明かに北海道からの *regina* の特徴をあらわしているので東北地方の一部では *regina* が分布していることは確かであるが，何処まで分布するかは不明である．

1) Zephyrus Vol. VII, pars 4, tab. 16, fig. 7, 1938.

2. *Favonius saphirinus saphirinus* (STAUDINGER, 1887)

=*Favonius saphirinus nipponicus* MURAYAMA, 1953 **syn. nov.**

Favonius saphirinus nipponicus MURAYAMA, Trans. Lep. Soc. Jap. 3, pt. 3, pp. 18–19, figs. 10–12, 1953.

=*Favonius saphirinus jezonicus* MURAYAMA, 1953 **syn. nov.**

Favonius saphirinus jezonicus MURAYAMA, Trans. Lep. Soc. Jap. 3, pt. 3, p. 19, figs. 13–15, 1953.

=*Favonius saphirinus oseanus* MURAYAMA, 1954 **syn. nov.**

Favonius saphirinus oseanus MURAYAMA, New Entomologist 3, no. 4, pp. 33–34, 1954.

以上3亜種は村山修一氏が1953年，1954年，「蝶と蛾」及び「ニュー・エントモロジスト」に記載されたもので，ここで subsp. *nipponicus* を本州型，subsp. *jezonicus* を北海道型，subsp. *oseanus* を尾瀬型と略称する．

本州型：村山氏はこの亜種の特徴として原亜種に比し，大型，♀の前翅表面の斑紋変化少し，裏面前翅才一室外縁に近い黒紋の上半に黄赤色斑を交えない，同中室外側の暗褐色線は狭い等の特徴を挙げ，大阪府能勢，滋賀県愛知川流域産のものをタイプとして本州産のものを別亜種とされたが，私の蔵する京都，滋賀，大阪の各地の多数の標本を検した結果，♀前翅の斑紋変化は，ほとんどないもの，淡くあらわれるもの，その上にはっきりとした黄色斑紋を2個あらわすもの等とむしろ原種同様変化は多い．又裏面の斑紋変化は個体による変異の巾広く，原亜種の特徴を持つものも見出し得る．形の大きさ以外に亜種としての特徴を見出し得ない．京都産の私の所有する以外多数の標本を拝見させていただいた垂井由継氏に紙上感謝の意を表します．

北海道型：この型は確かに本州型に比すると形は小さい．しかし尾瀬型となると，可成りこの型に近くなり，青森県で採集されたものに至っては全く差違は見出せなくなる．

この型の特徴として小型以外に，本州型同様♀前翅表面の変化少きこと，♂表面外縁の黒帯は本州型に比し狭い．前翅裏面中室外側の暗灰色帯は一層狭く，前後翅を通じて本州型より暗色斑の発達は遙かに悪く，後翅に於て著し，肛角部の橙色斑及びその中の黒点も微弱，又外縁に並ぶ暗色列紋も消失に近い個体もある等を挙げていられる．何れの特徴も全体の形が小さくなると比例して，斑紋その他が小さくなる傾向及び形が小さくなると色彩の発達の弱くなる傾向と一致しており，関西でも時折採集される同様の小型のもの（個体変異）はこの傾向をもっており，尾瀬のものにはすべての点で近くなり，少し小型のものとなると区別し難い．

尾瀬型：この亜種の特徴として村山氏は高山型であって本州の福島，群馬県境地帯の尾瀬地方（2,000m）にのみ知られる．本州型に比し小型，♂表面後翅外縁の黒帯は巾狭く，裏面♂♀共暗色を帯びた斑紋，肛角部の橙色斑紋共ずっと弱いが北海道のもの程でないと云った点を挙げていられる．これは赤城，榛名等北関東で得られるものと全く同じで，尾瀬地方特産のものでない．この亜種記載に村山氏が使われた材料はすべて私の採集したものでパラタイプの大部分は私の手許に返されている．採集の場所は福島，群馬の県境2,000mの地の如く書かれているが，尾瀬近辺で2,000mというと山頂部で，かかる所に食草もなく，棲息地はすべて1,000～1,200m程度の所である．勿論高山型とはいえない．1939，1940，1943年と三度にわたって同地で私自身採集した200頭を越える標本を検した結果，この種の固体変異の範囲を充分知ることが出来た．而して村山氏の記載された各型の何れの特徴をも見出し得て，尚青森県の標本を得るに及んで，北海道のものと関西のものをとりあげて比較すると大小の差は可成り大きいが，その中間地帯において移行をあらわす関係が判明し，大陸からの原亜種の範疇を出ないものである確信を得た．

以上の次才により三つの新しい亜種は何れも原亜種 subsp. *saphirinus* STAUDINGER のシノニムとする．

3. *Neozephyrus aurorinus alpinus* MURAYAMA, 1954

=*Neozephyrus aurorinus kansaiensis* MURAYAMA, 1954 **syn. nov.**

Neozephyrus aurorinus alpinus MURAYAMA, New Entomologist 3, no.4, pp. 34–35, 1954.

Neozephyrus aurorinus kansaiensis MURAYAMA, New Entomologist 3, no.4, p. 35, 1954.

村山氏は本州中部，関東地方のものを北海道（原亜種）のものから別亜種として *alpinus* なる亜種名を，又近畿地方以西の関西地方のものに更に別亜種として *kansaiensis* の亜種名を与えて区別された．

前者は北海道のものに比し大型その他の特徴を挙げていられる．これは原亜種の個体変異の範囲内のものでないかとの疑問もあるが，今手許に東北，北海道の個体変異の範囲を充分に検討すべき材料がないので，これは将来の問題として後者即ち関西地方の subsp. ***kansaiensis*** に就いて述べる．

村山氏は subsp. ***alpinus*** に比し，（1）一般に稍々大型．（2）♂表面後翅縁部の黒帯は稍々巾広し．（3）裏面後翅外縁に近い褐色帯は一般に暗い．（4）♀前翅表面才 1b 室は勿論中室にも青色斑紋を有し，橙色斑紋は中室端と才3室にあらわれる．前翅に橙色斑紋のみ出るものは稀である．等の特徴を挙げていられる．しかし中部関東地方のもので，大きさで区別出来るものもあるが，又（1）（2）（3）の特徴を備えて全く区別出来ないものも可成りあって，全然個体変異の範囲のものと見るべきである．♀前翅表面の斑紋については村山氏の指摘された傾向はあるが，中部地方にも所謂 A,B 型の顕著な個体も見られる．かかる♀のもつ一つの傾向のみの特徴では到底亜種として区別し難い．よって subsp. ***kansaiensis*** は subsp. ***alpinus*** のシノニムとする．

Summary

In the present paper the author has synonymized the following five subspecies.

1. *Neozephyrus taxila japonicus* (MURRAY, 1875)
   = *Neozephyrus taxila monticola* SHIRÔZU, 1952. **syn. nov.**

Monticola was described by T. SHIRÔZU from material from the mountainous region of Central Honshu. But a careful study of many specimens has revealed that the characteristics of *monticola* agreed with those of the small form of *japonicus*. It should further be noted that the common form, *japonicus*, was already recorded from the original type locality of *monticola* in 1933.

2. *Favonius saphirinus saphirinus* (STAUDINGER, 1887)
   = *Favonius saphirinus nipponicus* MURAYAMA, 1953. **syn. nov.**
   = *Favonius saphirinus jezonicus* MURAYAMA, 1953. **syn. nov.**
   = *Favonius saphirinus oseanus* MURAYAMA, 1954. **syn. nov.**

Separating from the continental original species, S. MURAYAMA devided Japanese *Favonius saphirinus* into three subspecies enumerated above. But an examination of many specimens from various regions of Japan has shown that the subspecific characters described by MURAYAMA were contained within the range of individual variation in the original species.

3. *Neozephyrus aurorinus alpinus* MURAYAMA, 1954.
   = *Neozephyrus aurorinus kansaiensis* MURAYAMA, 1954. **syn. nov.**

Aurorinus from Honshu was distinguished from that of Hokkaido by MURAYAMA and was separated into two subspecies: the one from the northern part of the Chubu district and the other from the western part of the Kinki district. Based on a comparison of many specimens from various regions in Japan, I was led to synonymized *kansaiensis* because its characters given by MURAYAMA represent no subspecific divergency and should be considered as individual variation, though *alpinus* was recognizable as a good subspecies.

イチモンジチョウの産卵に就いて

若林 守男

本種の産卵行動については，林慶氏の「日本蝶類解説」中に述べられているように，成虫は翅を展開し静止の状態で1卵を葉上面に産付されることになっている．ところが，1953年6月下旬，私が大阪府下箕部で目撃した2例の場合はそれと根本的に喰い違って，成虫が食草スイカズラの葉に完全に静止することなく，極めてゆるい飛翔の状態で軽く脚部を葉に置いて腹部を裏面に廻し，葉裏面中央部附近に産卵した．しかも，その産卵数も1卵と限定されることなく1〜4卵が，一頭の成虫によって産卵された．また，附近の食草を検べて見たが41卵のうち，一個の例外もなく葉裏であった．そこで当時，当の林慶氏と御意見をも交換したが，その後本種の産卵を観察する機会を得ることが出来ないため，産卵位置，産卵数，産卵行動の三点について何れが異常であるのか結論を得ることが出来ない．とにかく非常に面白い事実と思い，ここに御報告申上げておく．